第10回

きずなづくり大賞2016

―入選集―

～地域や家族の多様な

「つながり」

をつくろう～

社会福祉法人 東京都社会福祉協議会

もくじ

きずなづくり大賞に寄せて

東京都知事賞

社会福祉法人　東京都社会福祉協議会　会長　青山　佾

東京新聞賞

「つながる」五段活用～陽だまりカフェの実践　安達聡子…3

繋がり　山本昌子…11

東京都社会福祉協議会会長賞

地域のおじいちゃん、おばあちゃんとのつながり　村瀬礼…19

「ボランティア活動を通しての中学生の見守り活動」について　深町聰子…26

運営委員会委員長賞

「笑える！政治教育ショー」を全国の高校で行いたい　高松奈々…33

私の育児を変えたフリーペーパー制作　山本珠海…40

きずなという名のオアシス連鎖　木村庄司…46

聞き上手もボランティア　大島康宏…54
人のために動く　※野口友莉香　60
※青少年特別賞
（東京都社会福祉協議会会長賞、運営委員長賞は受付順で掲載しています）

第10回きずなづくり大賞２０１６～地域や家族の多様な「つながり」をつくろう～資料

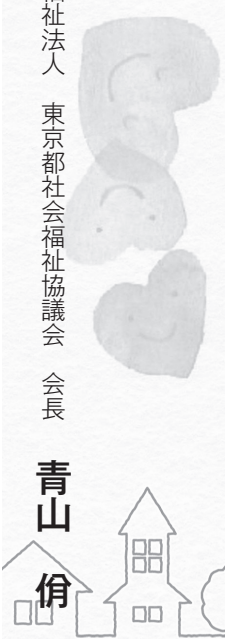
※作品の著作権は東京都社会福祉協議会に属します

作品の個人名の表記については、作者より、ご本人の了解をいただいています

（一部仮名の場合もあります。）

きずなづくり大賞に寄せて

社会福祉法人　東京都社会福祉協議会　会長　青山　佾



２００７年からきずなづくり大賞（２０１２年までは家族力大賞）事業が始まりました。この事業の主旨は家族の絆や地域とのつながりの大切さについて、多くの方と一緒に考えていきたい。また新しい家族のあり方、環境・子育て・教育などのネットワーク活動、親の介護や子育ての苦労と発見など、つながりを作り出してゆくことによって新しい力を得て問題を乗り越えたり、社会に役立ったりという体験談の募集を行い、優れた作品には東京都知事賞、東京新聞賞を授与するという事業です。

その後、東日本大震災という未曽有の災害に見舞われ、昨年も熊本地震、台風等による風水害と災害が相次ぎました。障害者施設では、あってはならない最悪な殺人事件が起こるなど、「命」や「生きる」ということをあらためて突きつけられた年でもありました。

また社会では、少子高齢化が進み、高齢者のみの世帯や単身世帯、ひとり親家庭が増加し、世代間のつながりや社会関係の希薄化が深刻になってきています。労働市場では不安定雇用がますます常態化し、格差の拡大や生活困窮状態が広がってきています。それらの背景から孤立・困窮の状態は見えにくく、個人や家族のもつ課題は多様化・複雑化・深刻化し大きな社会的課題となっています。

こうした災害をはじめとする厳しく辛い経験から、私たちは「家族」「地域」「仲間」というつながりの大切さを学びました。そして全国や世界各地から集まってきた支援は、日頃では気づかない「見えないつながり」を感じた方も少なくなかったではないでしょうか。

今回のきずなづくり大賞にも自宅の一部をデイサービスに活用して認知症の理解を進めるため、地域の方々とカフェを開き居場所づくりをしている話や、ご本人の経験から得た人と人の繋がりの素晴らしさを多くの方々にも伝えていきたいという思いから応募された方、ボランティアを通じて地域のおじいちゃん、おばあちゃんとの多世代での交流の話など多様なつながりと心温まる作品が寄せられました。

２０２０年には東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。世界各国から選手を

はじめたくさんの方々が日本を訪れます。

〝おもてなしの心〟は、〝人と人とのつながり〟からやがて〝きずな〟になると言ってもいいのではないでしょうか。

ぜひ、多くの方々にご一読いただき、〝人と人とのつながり〟をあらためて見つめなおし、〝きずな〟を大切に紡いでいっていただくことを心から願っております。

ところで、この「きずなづくり大賞」事業は10年のあいだ、多くの応募者とていねいな審査をして下さる袖井孝子委員長のご指導のもと審査委員の先生方のご協力があり続けることができました。

この間、自宅を開放し多世代の交流が広がり居場所につながっていった話や親の帰りが遅い子どもたちや赤ちゃんを抱えたシングルマザーのために始めた食堂の作品、大病を患った経験から患者や家族の孤独にインターネットを利用して支えあえるシステム作りをした作品など新しい時代の〝つながり〟を感じさせる作品など多くの作品が寄せられてきました。

この10年をひとつの節目として「きずなづくり大賞」の作品募集は今回をもって終了し、新たな展開を考えてまいりたいと存じます。

長い間、「きずなづくり大賞」事業を支えてくださった皆さまに厚く御礼申し上げます。

東京都知事賞

●東京都知事賞

「つながる」五段活用～陽だまりカフェの実践

安達 聡子　54歳（東京都町田市）

平成27年1月 義父が89歳でこの世を去りました。義父は二世帯住宅の1階を使っており、各部屋引き戸や襖をあけるとワンルームになるようなレイアウトで、キッチンは広く、トイレも2箇所あり、有効活用ができないかと考えていました。

当初1階を地域の方々に開放することを考えたのですが、玄関が一つしかないため戸締りや防犯上このままでの開放は困難…どうしようかと考えていた矢先に、あるデイサービスが、今借りている場所からの立ち退きを迫られていることを知り、無償で提供することにしました。

そこは若年性認知症の方々を中心に受け入れている「DAYS BLG!」というデイサービスで、以前ケアマネジャーとして自分の担当している方がお世話になった経緯がありまし

た。話が決まると、ご利用者さんであるメンバーさんとスタッフが一丸となり不用品の片付け、大掃除、粗大ごみの搬出をし、庭のウッドデッキ側から出入りできるように入口をつけ、壁紙を新しくするなどリフォームも入りました。3カ月かけ自分たちのデイサービスの場所を自分たちで作り上げ、２０１５年12月我が家の1階にデイサービスがオープンしました。その間、近所の方々にはデイサービスをご理解いただけるよう活動や趣旨を説明に行き、知ってもらう努力をしましたが、いざオープンしてみると「いつも介護の人に連れられて、ぞろぞろ歩いていて…なんか気持ち悪い…」などと言われ、なかなか理解が進みません。認知症の方に対する偏見も強く感じられました。

デイサービスは日曜日が休みです。地域の方に認知症について理解をしてもらうために、地域の方も認知症の方も介護者の方も気軽に集え「つながる」ことができる場所がここにできないかと考え、月1回、第3日曜日にバリアフリーカフェ（認知症カフェ）を開催することにしました。実行委員会を立ち上げ、地域でふれあいサロンや地方から呼び寄せられた高齢者の集いの場を開催している方、自治会の役員をきっかけに高齢化を心配されている方などに協力を求めました。夫も日曜日なので用事がなければ手伝うと言ってくれま

した。デイサービスをご利用のメンバーさんとそのご家族にもPR。近所の方々にもお知らせを配りました。

「つながらない」実際にカフェを開催してみると、あくまでも「カフェ」にこだわり、出欠を取らない、ぶらりと立ち寄ってもらうというスタンスを取っているため、初回は大量の食事が余ってしまいました。近所の閉じこもりがちな方、認知症の初期症状が疑われる方などをお誘いしましたが、来て下さらなく…結局デイサービスのメンバーさんとご家族、実行委員中心でなかなか思うようにはつながりません。

「つながります」２回目はご近所の方が友人を誘って来てくれ人数が増えてきました。はじめはちょっと緊張しておられた方もリラックスして過ごされ、そのとき来られた町内会の班長の方から別の日曜日に班の懇親会のための施設利用の申し込みもありました。近隣の介護施設や地域包括支援センターの方なども集まりました。この日はセルフサンドイッチのバイキングにしました。

「つながる」前回がサンドイッチだったことで「日本人はやっぱりおにぎりよ！今度は

おにぎりパーティにしない？」という声が上がりました。参加者の方から声が上がると言うのはとてもうれしいことです。7～8人でおにぎりを作りながら丸・三角・大きさなど楽しい会話が弾みます。初対面の方同士でも「おむすび」は人と人とを「結んで」くれました。飛び入りで地域包括支援センターの職員が田舎から干物が送られてきたと、七輪持参で参入！焼きたて「ワカシ」の干物も大好評です。

「つながれば…」認知症のご主人を介護している方がご主人と一緒に。認知症サポーターを増やす活動をしているキャラバンメイトの方も忙しい時間の合間に毎回参加してくれます。ピアノやギターで歌を歌ったり折り紙をしたり。あっちの隅では話が弾み…また食器洗いなどを積極的にしてくれる方も。「夫が施設に入所してから、自分の食器だけだから…こんなに洗うの久しぶりよ！」と嬉しそうに話してくださいました。閉じこもりがちだった方から「久しぶりに歌を歌ったわ…楽しかった」などの感想も聞くことができました。

「つながろう！」「楽しかったわ～また来るわね！」「次は折り紙の続きをつくるわ…」「次回は私がお料理考えたい！」「昔は折り紙得意だったけど…できなくなってる。やって

みないとわからないわね・少し指先も動かさないとね。」こうして参加者の気づきもあり、毎回少しずつ人の輪が広がっていきます。

次回は場所を変更して、町田市も共催している「RUN伴」（認知症の方もそうでない方も一緒にタスキをつないで走ろうというイベント）に合わせ、中継所にあたる町田市南第3高齢者支援センター（地域包括支援センター）の2階の会議室を借りて「出張陽だまりカフェ…RUN伴を応援しよう！つながれば認知症は怖くない！」と銘打って開催予定です。認知症のご主人を介護された方の体験談や現在されている方のお話などを聞き、少しでも認知症に対する偏見や恐れ、嫌悪感などが軽減し、誰にでも起こりうることと理解しあえると良いと思っています。

まだ始まったばかりの活動で、「つながり」は小さいものです。本当はもっと回数も増やしたいところですが、フルタイムの仕事を持っているため、なかなか思うようにはいきません。地域の高齢化を考えると、例えば集まった方々の中でご希望があれば車でスーパーに行って普段買ってこられないような重いものなどを買ってくるとか、ちょっとした困りごとを解決するようなことも今後は必要ではないかと感じています。介護職やケアマ

ネジャーの知識を活かして介護やその他の相談なども気軽にしていただけるような場所にしていけたらと考えています。

私の住んでいるこの地域は40年ほど前に一斉に開発された一戸建て中心の新興住宅地であり、高齢化率が50パーセントに迫っています。しかも最初に転入されてきた方は80代になっており、後期高齢者が多い事が特徴です。都心から遠くターミナルの駅までバスという交通の不便さもあり、宅地が広いのにもかかわらず子供世代との同居や二世帯住宅も少なく、高齢者だけや一人暮らしが多くなっています。２０２５年問題よりもはるかに早く様々な問題が出ることが予測され、だからこそ皆で知恵を絞り、少しのおせっかいと優しさや思いやりの心をもって楽しく人と人とのつながりを作っていく事が必須であると実感しています。

さあ！今こそつながる時！

東京新聞賞

●東京新聞賞

繋がり

山本 昌子　23歳（東京都荒川区）

私は生後4か月に親元を離れ施設に預けられました。その当時のことはまだ幼すぎてよく覚えていません。物心ついた頃には、施設での生活、親と離れた生活が当たり前でした。そんな私は、乳児院、児童養護施設、自立援助ホームと17年間の施設生活で育てていただきました。現在23歳で保育士として児童館の学童クラブにて働いています。幼いころからの環境に、「なぜ自分は施設にいるのだろう」と感じることは少なかったです。小学4年生くらいまでは世の中の半分くらいが自分と同じ施設での生活や親の離婚が当たり前だと思っていたほどです。私は、母親の存在は知りません。記憶も全くないです。父親は大人になったいまでもたまに食事に行くことなどあります。でもその関係は親子というより友達に近いと感じています。それでも父親は私を父親なりに愛そうとしてくれていたと今は

感じています。そんな私にはいま「児童養護施設の職員になりたい」という夢、目標があります。この思いが芽生えたきっかけはよく覚えていませんが、中学生くらいからずっとそう考えていました。最初の頃は、施設を卒業して保育士の資格を取ったらすぐにでも働きたいと思っていました。しかし今思うとその気持ちは、施設で働けば寂しくない、自分の居場所を確保したいそんな気持ちが強かったと感じています。子ども達のためでなく私は自分のために働こうとしていました。でも今は、自分が児童養護施設で育ったという過去を自分自身できちんと受け止め、子ども視線になりがちな考え方や過去の自分が強くなりすぎないように色々な観点からの児童養護施設を知り学びそのうえで働きたいと考えています。そのために児童館で働きながら児童養護施設に関わるボランティア活動をさせていただいています。今はそのような形から関わりをもたせていただいています。そんなボランティア活動の一つに「おもいつき興津臨海行事」という夏に一週間千葉にある学生寮を貸していただきそこで2泊3日で子ども達と海で遊ぶことをメインに過ごすというボランティアがあります。大体年間100名の子ども達と関わりを持つことができます。60年という歴史ある活動になります。この活動には私は子どもの頃は対象者として利用させて

いただいていました。楽しかったこの夏を忘れることが出来ず、ずっといつかこの活動のボランティアをさせていただきたいと考えていました。そのために、施設を出た1年目に色々な方を伝って探し活動に参加させていただけることになりました。10年ぶりに訪れた寮は子どもの頃よりとても狭く小さく感じ、走り回っていた子どもの頃がとても懐かしく感じました。私が子どもの頃のボランティアスタッフもなかにはまだ続けている方もいました。びっくりするとともにとても懐かしさに胸が熱くなりました。小さい頃の繋がりが今でもこうして残っていることに心より感謝しています。そしていま私がいまメインに活動させていただいているのが、ＡＣＨＡプロジェクトという児童養護施設を卒園して頑張っている子ども達へ成人式の振袖を着ての前撮り後撮り撮影や当日振袖の貸し出しを行っている活動です。恥ずかしながら今年の3月に立ち上げさせていただき代表として活動させていただいております。この活動の立ち上げのきっかけには、私自身の経験が大きく関わっています。私自身成人式にて高額な振袖を着ることは難しく欠席しました。その日は大雪で成人式が気になりながらも働いていたのを今でも覚えています。前撮りもできませんでした。私にとってその時期が精神的にも一番辛い時期でした。自分が施設で育っ

たということの意味を実感し、現実と向き合わなければなりませんでした。孤独感と戦う毎日でした。学費も生活費も自分でやりくりする毎日に余裕はなくいつでもギリギリでした。フェイスブックなどＳＮＳにあげられるみんなの前撮り写真や成人式当日の写真が羨ましかったです。周りからの成人式は一生に一度だから行っておいでという言葉に「行きたくない」「興味ない」これが私の小さな意地でした。そんな中、その頃通っていた専門学校の先輩が後撮り撮影という形で全額負担にて撮影をしていただくことができました。この時に「少しでも自分は大切にされる存在だと思って生きてほしい」というメッセージをいただきました。この経験がとても嬉しく生きる勇気にまた新たな一歩に繋がったと感じています。そのために、これを次へ繋げていきたい、一番辛い時期だと思うからこそみんなを少しでも支え力になりたいいそんな思いから立ち上げさせていただきました。このプロジェクトの名前もそんな先輩の名前からとらせていただいております。現在３回の撮影を終えており、毎日新聞社にて登壇もさせていただき、翌日には毎日新聞にも掲載していただきました。今年あと３回の撮影を予定しております。全国ムラなく支援していきたいとの思いから来年には出張撮影を予定しています。そして今年３月の立ち上げからアッ

プテンポにここまで来られたことに驚くとともに、本当に多くの方々の支えがあってこそのことだと感じております。心より感謝しております。私の今の児童養護施設への色々な活動は私のいままでの人生に大きく繋がっていると感じています。多くの人達との繋がりから成り立っています。そしていまこうして活動をしている中で、今までの多くの方々からの支えを実感しています。私には親と生活することやまっすぐに愛されるということは叶いませんでした。決して普通の生活や人生ではなかったかもしれません。でもそのぶん多くの方々に出会い支えていただくという大切なものを得ることができたと感じています。それはプラスでありかけがえのないものだと感じています。心より感謝しています。ボランティア活動にて、目的の達成もとても大切なことだと思います。しかしそれのみでなく大きな繋がりこそがかけがえのない何よりも大切なものだと考えています。そんな環境を築いていきたいと考えています。世の中はこんなにもみんなが誰かを思い考え動いてくれるのだと感動しています。この繋がりをこれからも大事にしていきたいです。

東京都社会福祉協議会会長賞

●東京都社会福祉協議会会長賞

地域のおじいちゃん、おばあちゃんとのつながり

村瀬 礼　12歳（東京都豊島区）

ぼくには、岐阜と大阪の祖父母のほかに、近所にぼくを応援してくれるおじいちゃんおばあちゃんがいます。いつも、ボランティアに行くと『ありがとね。大きくなったね。うまくなったね。いつもえらいね。』などといってほめてくれます。ぼくはボランティアをするといい気持ちになります。相手もいい気持ちになるようです。なぜなら、ボランティアをする時は人を手伝うことで自分を誇りに思えて嬉しくなるし、ボランティアをされる方は他人であるぼくが、手伝うことで嬉しくなると思うからです。ぼくは人を励ますためにこの活動をしています。ぼくが4年前にアメリカから引っ越してきたとき、近くに知り合いは誰もいませんでした。日本人が弟とぼくだけのシカゴの学校へ毎日車で通っていました。国籍は色々でアメリカ人、ロシア人、メキシコ人、カナダ人、韓国人、インド人で

した。引っ越しをしてからは、その生活が一転、クラスはほぼ全員日本人で一人中国の子がいるだけでした。もちろん日本語だけでの授業です。毎日15分自分であるいて学校にいくことになりました。歩道をあるく生活をしていなかったので明治通りや荒川線の踏切まで通っていく通学路に母はとても心配で最初のうちはついてきていました。勉強は毎日とても大変でした。友達もなかなかできませんでした。アメリカにいた時は、バイオリンの仲間と老人ホームでコンサートをしていたこともあって、母が近所のデイケアと養護老人施設へコンサートをさせてもらえないかお願いに行きました。最初のコンサートは、おやつ作りのイベントのお手伝いをさせてもらい、みんなが試食をしたあと、ぼくと母と弟と三人でメヌエットなど三曲バイオリンで演奏しました。エプロンと三角巾をつけたままの演奏だったのでなんだか不思議な演奏会だったけど、きいている人は喜んでくれていました。もっと聞きたいと言ってくれる人がいたので、おやつ作りのついでではなく、コンサートという形で活動するようになりました。それでこの四年間ずっと、学校が午前授業の日を演奏会の日にしています。演奏会の日は大急ぎで家にかえり、バイオリンを持って、近所の山吹の里へ走っていきます。

いそぎすぎて施設につくとバイオリンの弦が切れていたこともありました。その日は替えの弦がなかったので歌で参加しました。おじいちゃんおばあちゃんはぼくたちがいくとたいてい体操をしています。その体操の時間に間に合う時には、体操で使う手に持つ小豆の入ったお手玉の巨大なおもりを配ったり、回収したり、前で見本をみせる先生の横にならんでぼくたちも真似て体操をします。おじいちゃん、おばあちゃんはぼくたちも一緒に体をうごかすと嬉しそうです。だから早めに着いてまだ体操の時間であれば手伝うようにしています。そのあとが、ぼくたちの本番『1時間コンサート』です。最初は母と弟と僕の三人だったコンサートも、学校で話をしたり、母の友達の友達など興味を持った人が集まり同じ小学校の仲間、地域の仲間が次第に増えてきました。なので、ぼくたちはチームの名前も『マジカルストリングス』と名前をつけました。今、バイオリンを弾く人が7人、ピアノを弾く人が4人、クラリネットが2人、フルートが2人、歌を歌う人が4、5人という感じでだいたい15人～20人ぐらいでコンサートをする少しずつにぎやかな団体になっています。全て同じ高南小に通う児童です。たまに別の学校の子や遠くシカゴから遊びにきてくれてコンサートに参加してくれる子がいると特別編成のメンバーになること

もあります。人数も増えていますが、月に一回だった演奏が2回・3回と増えていったり近くのデイケアや養護施設だけだったのが、他のエリアのデイケアや施設、リハビリテーション病院、そして教会などからも「元気をもらえるコンサート」をやって欲しいと、オファーが来るようになりました。ぼくたちのレパートリーもどんどん増えています。たぶん100曲ぐらいは頭に入っています。たまにコンサートに学校の主事さんや放課後子ども教室のコーディネーターの人、校長先生、音楽の先生、担任の先生、同じマンションのおばちゃん、サポーターの人が本番をみにきてくれます。サポーターの人はピアニスト担当のお母さんが赤ちゃんを連れてくるときはコンサート中に抱っこしてくれていたりもします。みんなが仲がよく、いつも協力しあっているので、毎回コンサートは大成功します。仲間が増えるに連れてボランティアもどんどん楽しくなり、思い出に残る色々なエピソードが増えました。

そのうち特に心に残っていることをお話しします。

一つ目は、デイケアに通うおじいちゃんおばあちゃんとのコミュニケーションです。いつも行っている山吹の里では、どんどん顔見知りが増え、気軽に話かけてくれるようにな

りました。ぼくも必要以上は話をしなかったのが、ふつうに話が出来るようになりました。そして自分のしらないことを知ったり、昔の生活を教えてもらったりしているうちに、色々な新しいことを知ることが出来ました。そしてボランティアをすることで沢山のことを学べるということが分かりました。

二つ目はぼくが演奏している間に思う事です。はじめたころは、家でゆっくりしたいとか遊びに行きたいと思ってしまい、わざわざコンサートをするのがめんどくさいと思ってしまっていました。しかしどんどんコンサートの回数を重ねる間に、ちゃんと聴いてくる人たちの笑顔をみることで、とても嬉しい気持ちになれるようになれました。ぼくはこのことから、ボランティアはする人もされる人も、嬉しく、ハッピーな気持ちになれることを知りました。

三つ目はバイオリンの演奏が終わった後に握手をする時、かならず全員の方のもとに行って握手をするようにしています。聴いてくれたことへの感謝と元気で長生きしてほしいという気持ちを伝えるための握手です。いつもぼくはバイオリンを左側脇にはさんで弓も左で持って、右手で握手します。握手をしながら、いつも『ありがとうございました』

といいます。この握手の時に沢山のおじいちゃんおばあちゃんが声をかけてくださります。この時の温かい励ましや優しい言葉がけで、今まで頑張ったことが報われる気持ちになることもあります。好きな曲があったと嬉し涙を目をいっぱいにためて握手してくるおじいちゃんもいます。よくやってるね……と言ってボロボロぼくの手にも大粒の涙がかかるぐらい泣いているおばあちゃんから手を離すタイミングが分からずしばらく手を握り合っていたこともあります。あるおばあちゃんは、ぼくのバイオリンの先っぽのぐるぐる渦が巻いてある部分が美味しそうに見えたのかいきなりかぶりついてきたこともありました。おばあちゃんの噛んだところがぼくのバイオリンにくっきりついてしまいました。あのときは本当にびっくりしましたが、あとで認知症のお年寄りだったことを教えてもらったので、僕の中でなかったことに出来ました。それからは色々な人がいるので、握手をするときも配慮が必要だと思いました。定期的にいくリハビリテーション病院にも脳梗塞で動けないししゃべれないけれど、頭ではしっかり分かっているし音も聴こえているという人もいます。いつもは車椅子なのに、ラジオ体操の音が流れると反射で立って体操しようとするおじいちゃんもいます。

音ってすごいパワーを持っています。昔聞いた思い出の曲を聴くと、自然に笑顔になったり、涙がでたり色々な感情が湧きあがってくるようなのです。ぼくはコンサートをすることで日本の唱歌や童謡そして最近の曲も知ることができました。コンサートをするとお菓子をくれたり、アイスをごちそうしてくれるおばちゃんもいて、それももちろん嬉しいけれど、ぼくは、ぼくたちのコンサートで嬉しそうだったり、楽しそうだったり、色々な感情をみせてくれるおじいちゃん、おばあちゃんたちと出会えることが何よりもボランティアをしていて嬉しいです。受験で毎日塾にいかなくてはいけないし、日曜日もテストなどの予定が多くてコンサートに行くのがとても大変になってきているのですが、続けられる限り頑張っていこうと思っています。ぼくは、近所のおじいちゃん、おばあちゃんとのつながりは、今のぼくにとってなくてはならないものだし、大切にしていきたいと思っています。これからもぼくとマジカルストリングスを両方応援していてほしいです。

●東京都社会福祉協議会会長賞

「ボランティア活動を通しての中学生の見守り活動」について

深町 聰子　72歳（東京都板橋区）

地域の住民、青少年委員、民生児童委員が中心となって、中学生のボランティアを組織して28年目を迎えた。きっかけは、児童館に集まる中学生に、児童館の職員が声をかけ、近隣の障がい者施設のお祭りにボランティアとしてわたあめコーナーを出店したことである。そのコーナーの手伝いに行った青少年委員、民生児童委員、児童館職員、障がい者施設職員で「中学生のボランティア組織」を作ろうという機運が盛り上がった。早速、渉外係、財務係、事業係を組織し、「ボランティア読本」を作成。地元の中学校の先生方に協力して頂いて、事業毎に参加者を募るという形を取った。

平成元年の頃の中学生は真面目で、生徒会活動の子、兄弟に障がい児のいる子、仲間同士の誘い合いで毎回15～20人くらいの生徒が集まって来た。当時の主な事業は障がい者施

設のお祭り、児童館のイベント、地域の映画会等でのボランティアであった。リーダーシップのとれる子は進んで場を仕切ったり、黙々と自転車整理をしたり、ゴミ拾いをしたりしてくれた。学校公開時、校内で行き合うと軽く会釈をしてくれるとか、道端で挨拶をしたりするような関係が築けた。やがて、全国で中学生の荒れ方が問題になる頃がやってきて、ボランティア活動時に喫煙をして慌てさせたこともある。学校にも知らせると共に、喫煙は絶対に許せないと、ボランティア参加の熱意は認め乍ら悟したこともあった。その子は出来心であったのであろう、次回からは真面目に参加してくれた。中学生は長くて3年間しかボランティア活動に参加しないが、学校の成績が振るわなかったり、友達の輪に入れない子もやってくる。大人の実行委員の全てを受け入れる姿勢、優しい感謝の言葉かけが癒しになるのか、熱心に活動に参加してくれた。高校入試の際、成績が思わしくないが、ボランティア活動での体験を生き生きと語って入学を果たした子、同学年の友達の輪には入れないが小学生や障がい者に優しく接することができて、施設で働けた子など、私たちの活動の成果を感じている。中学生にはボランティア活動後、必ず感想を書いてもらう。人に喜んでもらえることに対する喜び、自分で気づいていなかった自分の辛抱強さへの驚

きなど何か手応えを感じてくれている。卒業して高校生になっても手伝いたいという子もいるので、ＯＢ組織も作った。中学生たちはＯＢのいうことは実によく聞く。ＯＢの指導力に私たち実行委員が学ぶことも多い。真夏のイベントでの着ぐるみは汗だくで大変であるが、人気の役割である。ＯＢはローテーションを巧みに組み、誘導、給水、除臭など工夫してくれている。28年間で、最初からの実行委員は２人だけになって了ったが、新しい委員も次々に加わってくれ、今や実行委員は60人、年間事業は15。参加中学校は地域の４中学校となった。事業の主なものは、板橋区26児童館主催の「フェスタ」での出店と着ぐるみ、特別支援学校、障がい者施設、老人保健施設、地域町会連合の祭りでの手伝い。夏休みには福祉園で利用者の方々と交流したりする福祉体験も。三月には「旅立ち」イベントで、東北大震災の義援金募金を街頭で行った。塾へ行く途中の小学生が自転車から下りて募金してくれた。車椅子の人も。「わたしのふるさと」を涙ながらに語った人も。一度行き過ぎてから、慰労のたい焼きを買ってくれた人がいたなど、中学生たちは貴重な体験をした。自分たちは支えられる立場だと思っていたが支える立場にもなれることを実感したと感想を述べた子もいる。

中学生との活動を通じて、私たちは地域の中学生に自分たちの子や孫であるような親近感と愛情を持ち、街なかで会った時は互いに声をかけ合う。離婚して懸命に生きているOBには励まし慰問をしたりもする。地域の大人たちがボランティアを通じて、地域の中学生たちを見守り続けるこの「板橋高島平ボランティアワークショップ」の組織をこれからも末永く守り続けていきたいと思う。中学生はボランティア活動を通して、自己発見と自己実現をし、私たち実行委員は中学生に元気をもらいながら、地域の中学生たちの見守りを続けていきたいと思う。

運営委委員会委員長賞

●運営委員会委員長賞

「笑える！政治教育ショー」を全国の高校で行いたい

高松 奈々　23歳（東京都新宿区）

「教え子が自殺した。自殺の理由は、頑張っているお父さんが報われないから。こんな社会に生きるのが辛い。私は、それで教師を辞めたんです」今にも泣きそうに話します。私の目の前にいる人は、強い女性です。いつもの明るさからは想像ができない表情に、私は言葉を失った。この強い女性は、政治家さん。何気なく、「なんで政治家になったんですか？」と聞いたら、教え子を亡くした経験から、格差社会を変えたいと思ったからだという。政治というものが遠くに感じていた私にとって、政治で解決するという選択が不思議に思えた。「何か私にできることは、ありますか？」私がそう聞くと、「若い人に伝えてください。政治を身近にして下さい」という大きな課題を頂戴しました。

ついに、今年の夏に18歳選挙権が導入されました。1年ぐらい前からニュースでは、連

日「18歳選挙権、若者の政治関心をどうやって高めるか」という特集が組まれていました。23歳、お笑い芸人の私は、うずうずとしておりました。なぜなら、そこに高校生や私たち若者がワクワクするような教材が無かったからです。このままじゃ、若者の政治離れが益々進んでしまう。でも、売れない若手のお笑い芸人の私は、お金もないし、出来ることが何もなかったのです。歯がゆい。何かしないと。居ても立ってもいられなくなり、私は新宿の小さなライブハウスで、4月30日にお笑いライブ「どーする?! 18歳選挙権」を開催することにしました。

いざ、ライブの準備を進めると一番困ったのが集客です。私のお笑いの単独ライブは200名の方がお越し下さります。ですが、タイトルに「18歳選挙権」と入れたところ、1ヶ月前に迫っても、チケットの予約が4枚という事態に。やはり、政治への抵抗があるようです。私は、主権者教育を行っているNPOの方や、子供向けのイベント団体などに、お時間を頂き、話しを伺いました。社会的に意義があるといって、NPOの代表の方がお知恵を貸して下さり、私はチラシをもって、色んなところを駆け巡りました。段々予約は増えたものの、肝心の18歳の予約は全くありませんでした。考えぬいた末、私は「高校生、

つまらなかったらチケット代全額返金」という策を実施しました。徹夜を続けライブの準備をし、ついにライブ本番を迎えました。実際、ライブが始まると、立ち見がでるほどの大盛況で、高校生や社会科の学校の先生、政治が好きな大人や政治家、メディア関係者がたくさん来て下さりました。

終わってから、私のところには列が絶えませんでした。「こんな政治の伝え方あるんですね！」「お笑いがあったから、政治がするすると入って来た」「私の娘にも聞かせたかった」「また次回もやってほしい」ありがたい反響をいただきました。

ですが、私はふと思うのです。これで本当に18歳・19歳の子たちに政治の楽しさが届くのだろうか。来て下さった高校生は数人。もっと社会的なムーブメントを作らなければならない。お金もないし、人もいない。そんな私には、やっぱり出来ないのだろうか。私は、一人でも多くの高校生に、この「笑える！政治教育ショー」を届けたいと思い、ならば、私が出向く方が早いと考えました。そこで、私は全国の高校へ、出前授業を行うことを決意致しました。

ところが、大きな壁が立ちはだかりました。新聞記事を見たという高校の先生から、「私

の高校でも、ぜひやってください」と連絡が来ました。「県立なもので、お金ないんですよ」「ご心配なさらないでください。こちらもボランティアでやっているので、お金は大丈夫です。」「良いんですか？ありがとうございます」「ちなみに場所はどちらですか？」「それが……北海道なんです」「えー?!」思わず絶叫しました。このような衝撃的な事件が起きました。北海道までの交通費を自腹でいくほど、お笑いで稼げていない。なんとかアルバイトせずに、オーディションやテレビに出させていただく、綱渡り状態なのです。関係者に話しを聞くと、学校はお金が出ない訳ではないものの、予算をつけるためには1年ぐらい前に審議をすることも多々あり、中々時間がかかる模様です。1年……。選挙が終わってしまう。私が作った教材も、ここで終りなのか。

私は、「政治をもっと身近に感じてほしい」という理由で、お笑い芸人になりました。その志に共感してくださる方が有り難いことに、私の周りにはたくさんいました。ならば、その方々からご支援いただき、そのお金で全国を駆け巡ればいい！そうだ！クラウドファンディングをしよう！クラウドファンディングとは、インターネット上で、募金を募るシステムです。私は、「笑える！政治教育」を全国の高校で行いたいという想いをぶつけま

した。

最初の1日では、2万円ぐらい。全然集まらないと思いきや、ご支援してくださった方が「こんな素晴らしいプロジェクトがあります！」と周りにお声かけくださり、段々とインターネット上でムーブメントが沸き起こり、およそ1ヶ月で、157名の方から、134万4千円ご支援をいただきました。お金は集まりました。

急いで、私が徹夜で作ったHPでしたが、話題を呼び、取材や高校からのお問い合わせで常にパンパンです。私の1日の睡眠時間は、ついに1時間を切りました。それでも、対応しきれない。そんな様子を見かねた、大学の先輩や先生方から「手伝うよ」とお声かけいただきました。SNSからも「お手伝いしたい」という声が聞こえました。私は、twitterで「ボランティア募集」とツイートしました。そしてなんと16名のボランティアチームが始動しました。主婦の方は、平日のお昼に時間がとれるので、出張授業に同行して授業の準備をしてくださり、デザインが出来る学生はワークショップで使うカードを作ってくださり、サラリーマンの方は、休日にクラウドファンディングのお礼の発送作業を手伝ってくださりました。

ご支援いただいた皆さまにお礼の品を送るために、ポストカードにサインをしている時に驚きました。ボランティアの方が宛名シールを貼ってくださったのですが、住所をみると、北海道から沖縄まで全国からご支援をいただいておりました。

ご支援をいただいた方から、こんなご連絡を頂きました。『うちの勉強嫌いの子が「政治って、こんなに楽しいんだ！」って嬉しそうに帰ってきた姿を見て、感動しました。息子に政治の楽しさを教えてくださり、ありがとうございます』というものや、授業を受けた高校生が「友達を説得して、選挙に行こうと思います」と言ってご支援して下さったのです。

よく、「最近の若い者は……」って言われます。ネットでは誹謗中傷が飛び交います。でも、ネットのいい面にも目を向けて下さい。ネットで広がった絆が、「笑える！政治教育ショー」を実現させたのです。そして私の選挙に行こうというツイートが１４０万人に最終的には届いたのです。

「政治をもっと身近に感じてほしい」１人のお笑い芸人が始めたことが、大きな広がりを見せました。僅か半年で、お笑いで全国の人をこれだけ巻き込めるなんて！お笑いって、すごい。新しい、絆です。こんなに素晴らしいお笑いを仕事にできるなんて、とても誇ら

しいです。お笑いの絆に、感謝！高校生の笑顔が見たい。だから、これからも全国を駆け回って、笑いで若者と政治を繋ぎます。

●運営委員会委員長賞

私の育児を変えたフリーペーパー制作

山本 珠海　34歳（東京都北区）

私は子育てが大嫌いでした。第一子を出産の為、勤めていた会社を退社。もともと子供が大好きで、子育てすることが楽しみで仕方ありませんでした。出産後、訪れたのは産後の鬱状態。さらに、息子はとにかくよく泣きました。抱っこしていないと泣いてしまうのでトイレもお風呂も抱っこしたまま、夜、ひどいと1時間毎に夜泣きをして、朝は5時くらいから起きてしまう。毎日が寝不足で本当に気持ちが壊れそうでした。大好きと思いたいのに、思えない。泣くたびに大嫌いになり、そんな感情を思ってしまう自分を責めました。数時間でも子供と離れたい。ゆっくり眠りたい。そんな事を人に言ったら「母親なんだから」「赤ちゃんは泣くのが仕事」。そんな風に言われてしまう気がして誰かに頼る事をせずに一人で抱える事が多かったと思います。息子が一歳を過ぎた頃、初めて一時託児を

利用。預けた瞬間に激しく泣き叫ぶ息子を見て「仕事もしていないのに、子供を預けるなんてダメな母親かな」などいろいろ複雑な気持ちがこみ上げてきて不安そうな私に、保育士さんが笑顔で「ゆっくりしてきてね行ってらっしゃい！」と一言。今までの重いしがらみみたいなものが一瞬で飛び去っていくのがわかりました。私はその一言が嬉しくて涙が止まらなかったのを覚えています。この時から誰かに頼ることは必要なんだと素直に思えるようになれたのです。

息子は3歳になり、娘を出産。その頃私は、子育てママ応援塾「ほっこり～の」というママのためのリフレッシュサロンを運営している内海さんに出会いました。もともと空間デザイン関係の仕事していた私に「ママのためのフリーペーパーを一緒に作らない？」と突然打診されました。空間と冊子は全く別物のデザインなので自信はなかったけれど、当時の私を救ってくれたあの一言のように、子育てで辛くて一人で悩んで孤独になってしまっているママを少しでも支援できるならと思いフリーペーパー制作の道へ踏み出してみることになりました。

フリーペーパーはまったくのゼロからのスタート。何から手をつけて良いのかさっぱりわからないまま、代表の内海さん、絵本ナビゲーターの茂木さん、デザインの経験があった私、3人のママ達で、手探りの制作が始まりました。自分の作業範囲が多い事に苛立ち、容赦なく文句を言いました。あまりの大変さに「子育てママ支援」である根本的な目的を見失いかけながらも、出会ってから数ヶ月の人間関係とは思えない濃い時間をかけ、知り合いのお教室や飲食店などの広告を載せた全8ページの「地域密着型子育てママ応援情報誌ほっこり～の」がヒヤヒヤワクワクの創刊となりました。

このフリーペーパーの母体となるのは、北区十条にある子育てママ応援塾ほっこり～のサロン本店。オムツ替え、休憩、授乳が無料のスペースがあり、ママのためのワークショップ、リフレクソロジー、ジェルネイル、一時託児などを利用できるママのためのサロンです。孤立した子育てをなくしていきたいという想いと、児童館などの公共の施設では、子供が主役になりがちなので、「子育てママ」がリフレッシュできたり、悩みを打ち明けられたり、行き詰まった時に「ほっ」と一息つける場所があったらいいなと自分の育児の経

験から思った代表の内海さんが当時一人で立ち上げたママたちの居場所なのです。

フリーペーパーは、この「ほっこり～の」の活動を広く知ってもらい、「一人で悩まないで」というメッセージを発信していく大事な役目をになっています。

号を重ねる毎に、私たち3人の手探りの様子を見かねて手伝ってくれるママがいたり、フリーペーパーを見て、一緒に作りたい！と言ってくれたり、デザインはできないけれど、配布したり広告をとってきます！と積極的に参加してくれるママたちが協力してくれたおかげで継続して作る事が出来ています。今でもフリーペーパーは営業、編集、企画、デザイン、校正、配布をすべてママ達だけで作っているのが私たちの自慢です。

現在では、公共の場所にも配布が許可されたり、第1号の時には想像もつかなかった、広告を載せたいと言ってくださる企業の方も増え、何よりも「いつも、ほっこり～の楽しみにしています！」と読者の方からの声を聞く事が多くなりました。わずか3千部だった発行部数は1万部になり、自分たちの想像以上に、地域に根付いたフリーペーパーに成長

してきたなと実感しています。

フリーペーパーの制作は、大変な事も多いけれど、それ以上にたくさんの新しい出会い、経験、感情、そして一緒にこの活動をしている大事な仲間の存在が、今までの人生にはなかった、とってもキラキラしたものを私に与えてくれます。何よりも子育てママの支援の内容を考えるこのフリーペーパーを通じて、どんな事にママが悩んでいるか、どんな情報があったら便利なのかなど、子育てを一歩引いて考える機会ができました。おかげで、自分の子育てにも冷静に向き合う事が出来ています。

息子と娘の育児には、もちろん大変さを感じる事もありますが、今は自分らしく立ち向かっていける自信を持っています。育児の悩みもフリーペーパーのネタのヒントになるのではないかと思ったり、あの時息子と一緒に泣いて過ごした日々は、今同じ気持ちで悩んでいるママを助ける力に繋がっているからありがたいなと思えるようにもなりました。

今後の目標は「地域密着型 子育てママ応援情報誌ほっこり～の」の配布地域の拡大と、ページ数を増やす事、さらにフリーペーパーに関わってくれるママスタッフを増やしていくことです。

関わってくれる事で、ママとしても人間としてもスキルアップしていける、仕事を辞めて育児で閉鎖的になってしまったママを社会と繋がれる仕組みを、フリーペーパーを通して作っていけたら最高だなと思っています。

●運営委員会委員長賞

きずなという名のオアシス連鎖

木村 庄司　37歳（東京都目黒区）

時は春。ここは、東京都立荏原看護学校の1階にあるラウンジルームである。

ここに集ったのは、「ボランティア」というツールを使って、我が看護学校が建てられている、そしてそこで学ばせてもらっている大田区に……そして大田区に住まわれている住民の皆様に……恩返しがしたい、貢献したい、という想いを持った1年生と2年生たちであった。

しかし、ボランティアをやりたいと集まったのはいいものの……皆が皆、どこから何をどう始めていけばいいのか、まったくわからない始末であった。何かをやりたいエネルギー

だけはピカイチで、大田区の誰にも負けていないつもりだったのだが……。

しかし事件はその後、すぐに起こった。

路頭に迷いながら、ふと皆で学校まわりの遊歩道を歩いている時に、ふとサークルメンバーのひとりが、道端に無造作に捨てられているペットボトルのキャップを見て呟いたのだ。

「このキャップを拾って何かリサイクルとかできないのかな……」と。

ズガガガガーーーーン！

なんとも言えない衝撃が、稲妻の如く、皆の背中を貫いた。そして、このひとことがきっかけで、エコキャップ運動の日々が始まるとは、その時まだ誰も知る由もなかった。

メンバーのひとことがあったその日から、皆で集められるだけの情報をかき集め、調べ倒した。結果、日本だけに留まらず、世界各国でペットボトルのキャップを集める、「エコキャップ運動」というものが存在することを知った。

なんと、ペットボトルのキャップは再利用することで、マンホール、ハンガー、ボールペン、うちわ、マグネットなどに、さらには車椅子や、発展途上国の子供たちへのワクチン代にまで変身してしまうのだ！

これは、看護の道を目指す看護学生の私たちにとっては願ったり適ったりのボランティア活動であった。

ということで、その日から、「荏原看護学校ボランティアサークル」が立ち上がり、メンバーひとりひとりが一丸となり、この日から毎日少しずつこつこつとペットボトルのキャップを集める運動が始まったのである。

学校まわりをはじめ、大田区のあらゆる道という道に無造作に落ちているペットボトルのキャップを拾い集める。拾い集める。拾い集める。雨の日も風の日も、台風であろうがなかろうが……拾い集めること半年……かなりの数のペットボトルのキャップを回収することに成功した。

また、半年間という短い期間ではあるが、エコキャップ運動をおこなうことで、ペットボトルのキャップがリサイクル品に使用されたり、街からゴミが減ったり、街全体が綺麗になったりした。だがそれだけではなく、エコキャップ運動をとおして、地域に住む方々とのきずなをつくる交流が、どんどん増えていくことを、私たちは実際の経験をとおして体感することができた。

というのも、大田区は高齢者が多い街で有名であり、それと同時に、助け合いの精神を持つ江戸っ子気質の方々が多い。

地域住民の方々は、私たちが道に落ちているペットボトルのキャップを拾い集める姿を

見かけると、「何やっているんだい？」と、気軽に声を掛けてきてくださるのだ。私たちがそれに答え、私たちの取り組んでいるボランティア活動の内容を、地域住民の方々に説明すると、笑顔で親身になって手伝ってくださる方も中にはいるほどだった。

私たちは、孤独という名の集合体砂漠・東京の街中で、一輪の花を咲かせるオアシスを作りたい。などという天真爛漫で大それた目標を掲げていたわけではないのだが……半年間もそんな活動を地道に地道に続けていくうちに、私たちと地域の住民の方々との間に、きずなという名のオアシスが少しずつ広がりつつあった。

「ほら、キャップ集めといたよ」と、袋いっぱいにキャップをいれて渡してくれる方までいらっしゃるほどだった。嬉しい。

私ごとではあるが、こういうことを当たり前かのように、笑顔でサクっと行動に移せる住民の方々、そしてそのような大田区の地域性が、私は大好きである。

課外でそうした活動をおこなっている一方で、学内でも私たちの努力は、少しずつでは

あったが、まわりの看護学生たちに広まりつつあった。

エコキャップ運動を始めてから数ヶ月が経とうとしている頃から、キャップを持ってきてくれる生徒が徐々にだが増えてきたのである。

これは非常に嬉しいことである。今までは顔も知らず、もちろん話したことさえもない、ただただ個々で動いている学校内の生徒同士という間柄だったのだが、エコキャップ運動というツールをとおして、お互いが笑顔で話すようになり、同じ目標に向かって突き進むことのできる、きずなを深めた仲間、という素晴らしい形に変わっていったように思えた。

私たちの活動は無駄ではなかった。少しずつでも活動を続けることで、笑顔と笑顔が化学反応を起こし、きずなという花同士が結ばれ、広がっていき、素敵なオアシスが出来上がっていくのを、現実として目の当たりにすることができた、そんな輝石のような奇跡の半年間の軌跡であった。

そして、この半年間の成果を次に繋げるためにも、私たちは短期目標として、10月におこなわれる学園祭にて、ひとつ挑戦することを決意した。

挑戦というのは、少しでも多くの人にボランティアの「ボ」の字だけでも知ってもらおうという塩梅で、エコキャップ運動をテーマにしたお芝居イベントをうつことにしたのだ。何もせず後悔するなら、やって後悔したほうが良い。とにかく少しでも多くの人に、エコキャップ運動という存在を知ってもらい、この運動の高みと、きずなの広がりを見据えて、明るい未来の展望へと繋げていきたいと考えている。

しかし、それで終わるわけではない。エコキャップ運動を続けることで、大田区の街をさらに活気づけ、ひとつでも多くの車椅子を創り出し、ひとつでも多くの高齢者の笑顔を生み出し、それに伴い、家族の笑顔も生んでいけたら……皆が皆、ウィンウィンの関係性を持つことができ、大田区の街はさらなる飛躍を遂げるはずである。そして、このハッピー

の連鎖が、ハッピーな世の中を作ってくれると私たちは信じている。

徐々にではあるが、この半年間で、きずなという名のオアシスが少しずつ広がり咲いていく世界を目の当たりにして、私たちは今、こう考えている。

これから学校を卒業するまで…なんて小さいことは言わずに、卒業し、社会人になってからも、この「エコキャップ運動」という活動を広げていく。そして大田区をはじめ、東京、日本、あらゆる地域全体に、そして医療の世界に、さらには発展途上国の子供たちへのワクチン代を通して世界に！ますます行動範囲を広げると同時に世界中にきずなという花を咲かせたオアシスを広げていきたいと、切に心からそう願って止まない。

こうした「きずなという名のオアシス連鎖」が、そこら中で広がっていくこと、それこそが今の私たちの夢…いや、私たちの長期目標である。

●運営委員会委員長賞

聞き上手もボランティア

大島 康宏　20歳（東京都豊島区）

最近、私の中でのボランティアのイメージが変わってきた。

初めて私がボランティアに参加したのは、高校二年の夏休み。私は、地元の子供家庭支援センターを訪れた。ボランティアとして、子供たちと遊ぶ他に、リーフレットを折ったり、おもちゃを拭いたりした。職員の方は皆喜んでくださり、それがとても嬉しかった。一方、「こんなことで役に立てているのだろうか」、「もっと効率よくしっかりやらなければ」など焦りもあった。また、職員の方が親切にお菓子などを頻繁に差し入れてくださった際も、「ボランティアで来ているのに、これほどお世話になってしまってよいのだろうか」と受け取るのに躊躇したこともあった。初めてのボランティアは、やりがいを感じることはできたが、のんびりとその場の雰囲気を楽しむ余裕などないままに終わってしまった。大学

に入学してからも、同じような心持ちでボランティア活動をしていたが、大学二年になった今、少しずつ自分の中でのボランティアに対する意識が変わってきた。

私は大学で、地域福祉とコミュニティ形成について学んでいる。そして、その学びをより広い視点から理解したいという思いが強く、入学してすぐに復興支援や地域活動などに取り組むいくつかの学生ボランティア団体に入った。その中の一つに、都内の団地で福島県からの広域避難者支援と地域コミュニティの活性化を目指して活動している団体がある。ここでの活動は本当に刺激的で、私のボランティアに対する意識が変わるきっかけを与えてくれた。

この団体では、団地の住民の方々といっしょに、夏祭りや冬祭り、サロン活動などを行っている。その中でも私が最も好きなのは、「商店街」と呼ばれている活動である。これは、団地のすぐ近くの老人ホームの屋内のスペースを借りて行うサロン活動で、交流スペースを設置して、様々な食べ物を販売している。

この地域は、坂が多いため、高齢者の方が買い物に行くのは大変だ。私たち学生は、近くの商店からパンや豆腐、お菓子などを購入して販売し、老人ホームの方と地域住民の方

とが交流できる空間作りも目指している。

私が「商店街」に最初に参加したのは、大学一年の冬だった。私は午前中からマフィンの販売を担当していた。始めは暇だと思っていたが、お昼時になるとたくさんの人がやってきた。皆並んだ商品を楽しそうに選んで買ってくださるので、少し忙しくなった。「今回はちゃんとボランティアらしいことができているなあ」と思っていた時、先輩から休憩をもらった。自分が売っていたマフィンと近くに並べてあったいくつかの惣菜を同じ団体の仲間から購入し、さてどこで食べようかと空席を探した。しかし、交流スペースはかなり混んでいて、空席はあまりなかった。席があっても、すでにそのテーブルは話が盛り上がっていて入りづらい。そんなことを考えてうろうろしていると、先輩が「どうしたの？せっかくなんだから、住民の方とおしゃべりすればいいのに」とやってきた。その先輩は、すたすた近くのテーブルへ行くと「ごいっしょしてもいいですか？」とその場にいた方々に声をかけ、私に空いている席に座るように促した。私は初対面の人と会うとすごく緊張してしまう上、すでにできている話の輪に入るのは苦手だった。でも、その心配はすぐに吹き飛んだ。隣に座っていたおばあちゃんが、にこにこしながら話しかけてくださった。

私も、すぐに緊張がほぐれ、おばあちゃんから好きなテレビの話、幼い頃の思い出、などいろいろな話を聞いた。中でも、お孫さんの話をしている時が一番楽しそうだった。やっぱりみんな孫はかわいいと思うんだなあ、とほっこりしていると「週に一回でもいいから、ちゃんとおばあちゃんに電話してあげなさいよ」と言われた。その時、「はい！」と返事はしたものの、内心ぎくりとした。たしかに、週に一回は電話で話しているけれど、町内会の話や趣味の手芸のことを聞いてもよくわからず、時間をかけてゆっくり話を聞くことはしていなかった。小学生の頃は、毎朝、祖母に電話をかけて学校に行く直前まで長話をするのが楽しみだったというのに…。そんなことを考えながら、一時間ほど話していると「今日は、楽しかったわ。お話を聞いてくれてありがとう」と言って、おばあちゃんはその場を後にした。私は話が上手なわけでもなく、ただ相槌を打ったり時々コメントをしたりしただけなのに、おばあちゃんは本当に楽しそうだった。その時、何か大切なことに気が付いたような気もしたが、仕事を再開させなければ、と慌てて販売に戻ってその日は終わった。

同じ活動に二回目に参加した時、昼頃にまた休憩をもらった。昼食を買って、空いてい

る席があるテーブルへ行って、緊張はしたが「お話に混ぜていただいてもいいですか?」と聞いてみた。すると、そのテーブルの人皆が「どうぞ座って」と笑顔で席を進めてくれた。そして、話はすぐに盛り上がった。といっても、相変わらず私は相槌とコメントの専門。話題は途中で、戦後直後のことになった。「あなたは平和な時代に生まれて幸せよ。私たちが子供のころは、ものがなかったのだから…」。戦中・戦後の話は祖母からたくさん聞かされていたので、「またか」という気持ちで話を聞いていた。給食の脱脂粉乳があまりにまずかったので先生に隠れていかに捨てるかを考えたこと、アメリカ兵にお菓子をもらったこと、戦車などの残骸を工夫して遊んだこと…。私はいつのまにか話に引き込まれていた。戦争というと、空襲や食糧難の話をよく聞く。もちろん、それらを知ることは大切だと思うが、もっと一人一人がどんな生活をし、その中でどんな工夫をしていたかという話も聞くことはすごく大切なように感じた。

そして、この日も「いっしょに話せて楽しかった。ありがとう」と言われた。そういえば、この間も他の人に同じようなことを言われたのを思い出し、その時はっと気が付いた。ボランティアというのは、なにも特別なことをするのではなく、お互いが肩肘はらず、楽

しく話をすることが重要なのだと思った。むしろ、ボランティアだからといって、作業に没頭したり、結果を出そうとしたりするのは、身勝手だし、相手に近づこうとしない時点でそれはボランティアではないと思った。これに気が付いた瞬間、心の霧がすっと晴れた気がした。

今でもこのサロン活動には参加しており、この経験は他のボランティア活動でも非常に役立っている。私は、東北でも東日本大震災の風化防止のためにヒアリングなどをしているが、交流をすることは非常に大切だと感じている。サロン活動で一声かければすぐに話の輪の中に入れることがわかっているから、住民の方々とすぐに打ち解けることができている。

近年、日本のボランティア意識は高まっているように思う。しかし、数か月前までの私も含め、ボランティアを単に無償の労働者と考えている人は多いように思う。相手が生きがいややりがいを感じられるようにすることもボランティアの大切な仕事だと考えれば、言葉のキャッチボールができる会話は、もっとも基本的なことだと思う。

授業やサークルで忙しい大学生活。私は、ふとした時に、サロン活動のおばあちゃんたちと話したくなる。「次はどんな話をしてくれるのだろう」。もっと聞き上手になりたい。

●運営委員会委員長賞（青少年特別賞）

人のために動く

野口 友莉香　16歳（東京都文京区）

私の好きな漫画に、こんな台詞がある。

「人が動く」「人のために動く」と書いて、「働く」

この台詞を読んだ時、私は父のことを思い浮かべた。

私の父は現在、パラリンピックの競泳で活躍する、木村敬一選手のコーチをしている。木村選手は病気により2歳の頃に失明したそうで、感覚的には生まれつきの視覚障害と変わらないという。私は父を介して、度々木村選手とお会いしたりお話ししたりする機会があるのだが、その中でも一番印象深い出来事は、木村選手の合宿の手伝いをしたことだ。

今年の春のことである。合宿は、父の故郷の島根県で行われた。私は最初、旅行に行く時と同じような軽い心持ちだったが、そこではただの旅行では体験することのできない、

人と人との支え合いを感じることができた。普段の生活から練習まで、様々な場面で、たくさんの人が人のために動いているのを実感したのだ。その例として、私が体験した2つの出来事を紹介しようと思う。

1つ目は、木村選手の練習を手伝ったときだ。まず私は、「タッピング」という仕事を手伝った。タッピングとは、視覚障害のある人が泳ぐ際に、タッパーと呼ばれる人がタッピング棒という専用の棒で、泳いでくる選手の頭を叩いて、ターンやフィニッシュのタイミングを知らせる仕事である。タッピングをしないと、選手は壁との距離感が掴めないため、タイムが遅れてしまったり、大きなケガの原因にもなりかねない。そんな大切な役割を、私は任されたのである。

最初は私でもできるのか不安だったが、やっていくうちに少しずつタイミングが掴めてきた。木村選手が綺麗にターンをしたのを見た時は、役に立てた気がして達成感があった。練習が終わった後、「タッピングが上手かった。」と木村選手が言っていたということを父から聞いた時はもっと嬉しかった。「人のために動くこと」の重要性と、そこから得られる喜びや達成感を、今までで1番体感できた瞬間だった。

練習場所のプールには、父の知り合いのコーチや、地元の新聞記者の方など、多くの人々が訪れた。そこで木村選手と話した人は皆、最後に必ず握手をし、「応援しています。」、「頑張ってください。」と笑顔で優しく声をかけていた。私はそれを見て、都会で暮らしていく中で忘れかけていた、相手のことを思い遣る気持ちの温かさを感じた。他者と関わる際に本来あるべき、人同士の正しい繋がり方のようなものが表れている光景を見た気がしたのだ。

2つ目は、生活面での出来事だ。木村選手が午前の練習を終え、お昼ご飯を買いに行く時、私が一緒に付き添ったのだが、木村選手は、初めてきた場所は1人で気楽に歩けないので、誰かの腕に掴まって出掛けないといけない。なので、その日は私の左腕に掴まってもらって、コンビニまで案内したのだ。

コンビニに到着し、おにぎりの並ぶ棚の前に立った時、木村選手は「何がある?」と私に問いかけた。私はそれを聞いて驚いた。後で聞いた話によると、木村選手はいつもおにぎりの具材が何かわからないまま買っているそうだ。そして食べた時に何味かわかり、たまに自分の嫌いな味のものを買ってしまうこともあるらしい。私たちは普段、当たり前の

ように自分の好きなものを好きなタイミングで食べられるが、それが木村選手には出来ないのだ。一緒に過ごしてみることで、改めて目が見えないことの不自由さを実感できた。そして、今自分が安心して暮らせる環境にあることに感謝し、もし周りに困っている人がいたらすぐに助けようと強く思った。

最近、障害者が被害に遭う事件・事故がニュースで取り上げられることが多い気がする。例えば、２０１６年8月15日の夕方、東京メトロ銀座線青山一丁目駅のホームで、盲導犬を連れていた目の不自由な会社員の男性が、線路に転落し電車にはねられて亡くなるという痛ましい事故があった。しかし、視覚障害者にとっては、線路に落ちてしまうのは極めて珍しいことではないそうだ。木村選手は、今までに2度線路に落ちた経験があるという。その時、木村選手は落ち着いて、自力でホームに上がったそうだが、焦って冷静な判断がとれなくなってしまう人もいるはずだ。線路に落ちた瞬間について、木村選手は「歩いていたら突然床が抜けたような感覚」だと教えてくださった。パニック状態に陥ってしまう人や、自力でホームに上がれる程の力がない人もいるだろうし、結局はそのような事故が起きないよう、未然に防ぐことが一番大切なのである。

私たちには何が出来るだろう。もしくは、そのような事故が起きる前に何が出来ただろう。スマートフォンやＳＮＳの発達などにより、以前に比べ、日常生活においての他者への関心がなくなってきていないだろうか。常にスマホの画面を見ているせいで、現実の世界で自分の近くにいる人や自分の周りで起こっている事へ目を向けられていないのではないか。都会では特にそのような傾向がある気がする。私がもしその事故が起こる時に現場にいたら、その人が線路に転落する前に無理矢理にでも引っ張って守ったのに。他者への気配りや思い遣りのある行動を皆が日頃から心がけていれば、困っている人や悩んでいる人を救えるときが来るかもしれないということを、より多くの人に理解し、行動に移してほしい。自分の隣にいる人が友人や知人でなかったとしても、その人を赤の他人と思ってよい理由にはならないのである。

木村選手は、「２０２０年に、東京はどんな街になっていてほしいですか」という質問に、「余裕のある街になっていてほしい」と答えた。それは、人々の心や気持ちに余裕があるということだそうで、「そうすれば、弱者に対する目線も変わるはず」と述べていた。現実の世界での他者との繋がりが隔絶されつつある今、私たちには「人のために動く」こと

が第一に求められているのではないだろうか。

第10回きずなづくり大賞2016　～地域や家族の多様な「つながり」をつくろう～

事業概要

主　催　社会福祉法人東京都社会福祉協議会

後　援　東京都
社会福祉法人東京都共同募金会

応募資格　(1)東京都内在住、在勤または在学の方
(2)東京都内のボランティア団体やＮＰＯ法人で活動している方

選考方法　運営委員会にて本審査を実施

選考基準　(1)自分の体験や実践が具体的に表現されているか
(2)地域の家族との関わりやつながりがテーマになっているか
(3)個人の体験を超えて、他の人や社会への応援メッセージになっているか

受付期間　平成28年7月1日～平成28年9月30日

きずなづくり大賞運営委員会

委員長

袖井　孝子　（お茶の水女子大学　名誉教授）

委　員

井之上　喬　（株式会社日本パブリックリレーションズ研究所　代表取締役社長、京都大学経営管理大学院特命教授）

大場　司　（東京新聞編集局次長）

髙橋　陽子　（公益社団法人日本フィランソロピー協会　理事長）

山崎　敏子　（ＮＰＯ法人海外広報協会専務理事）

竹内　誠　（東京都生活協同組合連合会　代表理事・専務理事）

梶原　洋　（東京都福祉保健局長）

横山　宏　（社会福祉法人東京都社会福祉協議会　副会長）

（敬称略）

ご協力いただいた企業の皆様

協賛

東京新聞

協力団体等

学校法人実務学園
七島信用組合
ＮＥＣネッツエスアイ株式会社

（敬称略）

発 行 日　平成29年2月28日
発　　行　社会福祉法人 東京都社会福祉協議会
東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823　東京都新宿区神楽河岸1-1
TEL:03-3235-1171
http://kizunazukuri.net/
（きずなづくり大賞　専用ウェブ）
発行部数　2,000部
印　　刷　共立速記印刷株式会社

◆この冊子は東京都共同募金会の助成により作成しました。